

【講演会】

インドにおける仏のすがたの変容

立 川 武 蔵

1

ご紹介いただきました立川です。今日はインドにおける仏のすがたの変容についてお話をしたいと思っております。

初めにインドのバラモン僧の習慣に従って、古代のウパニシャッドの一節を読ませていただきます。これはインドで式などが行われる際、初めに読み上げることになっているものですが、わたしもそれに習って読みあげたいと思います。『タイッティリーヤ・ウパニシャッド』の一節（3.1.1）です〔ウパニシャッドを詠む〕。

これは、父ヴァルナのもとに息子ブリグが参りまして、ブラフマンとは何か、と聞くくだりであります。父ヴァルナは、ブラフマンとは食物であり、息であり、目、耳、心、言葉である。そして、そこからもろもろのものが生まれ、それによってもろもろのものが生き、死んだ後はそこに帰っていくもの、それをブラフマンであると知れと答えます。これを聞いて息子ブリグは苦行を行い、ブラフマンを知ったということです。この一節は、ヒンドゥー教ではよく知られています。仏教誕生以前のテキストであって、仏教のものではありませんが、今日お話ししますブッダの姿あるいはブッダの本質とも深く関係します。

仏教の開祖ゴータマ・ブッダのイメージは、今日までいろいろな地域でさまざまに変わってきました。今日は、主としてインド・ネパール仏教におけるブッダのイメージの変容についてお話しします。

インド仏教の時代区分についてはご承知とは思いますが、まず簡単

に述べておきましょう。インドの仏教には、紀元前5世紀頃から紀元1200～1300年の間つまり17～18世紀の「寿命」がありました。このインド仏教の時代を3期、つまり、初期と中期と後期に分けることができます。初期仏教はブッダの時代から紀元前1世紀あたりまで、この初期仏教の前半を「原始仏教」と呼ぶ研究者もおられます。初期仏教の後半は一般に部派仏教と呼ばれております。紀元1世紀頃からおよそ600年のあたりまでを中期仏教（インド中期仏教）と呼ぶことができます。中期および後期のインド仏教は大乗仏教が主流です。

インド仏教の第3期つまり後期仏教は、600年頃から1200～1300年までの数世紀をいいます。この後期仏教の中で仏教のタントリズム（仏教の密教）が生まれます。密教あるいはタントリズムと呼ばれているかたちは、現在、東南アジアに流布しています上座仏教（テーラヴァーダ仏教）にはなく、大乗仏教においてのみ見られます。

今日は、主として大乗仏教における仏のすがたについてお話しします。さて、初期仏教の時代、ブッダがおられた頃あるいはブッダが亡くなって1～2世紀まではブッダが人間の姿で現されることはありませんでした。「聖なる」者が人間の姿で表現されないということは、インドにおいて特に珍しいことではありません。仏教の誕生以前、紀元前1500年あたりから約1000年の間はヴェーダ聖典を中心とした宗教が勢力を持っておりました。当時は、例えば、ホーマ（護摩）、すなわち火の中に供物を入れるといった儀式が行われておりましたが、その際、神々の彫像は用いられませんでした。ホーマなどの儀式において用いられないというのみではなく、ヴェーダの宗教においてパラムンたちは神々を彫像に作ったり図像に表したりするというものもなかったのです。

インドのインド仏教のあらすじをお話しましたので、次にブッダのすがたの変容を見ていくことにしましょう。

2

今日のお話をこの写真（図1）から始めることは、適切なことだと思っております。これは、ニューデリーの国立博物館で展示されている釈迦の遺骨です。19世紀の終わりに北インドのネパール国境近くのピフラハワで発掘されました。これが本当に釈迦の遺骨なのかどうかはよく分かりませんが、今日ではおそらくそうであろうと考えられています。

名古屋市の覚王山には日泰寺がありますが、日泰寺とは日本とタイのお寺ということです。明治期にタイの王室から日本にほんの少しの釈迦の遺骨、遺骨というよりは遺灰を譲り受けまして、それを祀る寺として日泰寺仏塔を作ったということです。

日泰寺にある遺灰は、ピフラハワで発見された遺骨の一部をタイ王室が譲り受け、またその一部を日本が譲り受けたものと聞いております。

仏教の歴史を考える場合、釈迦が涅槃に入ったことが重要です。また、ブッダの遺骨を人々がどのように考えてきたかということは、特に日本仏教にとって重要です。

『大般涅槃経』（ブッダ最後の旅）と呼ばれている経典には、ブッダ



図1



図2

の遺体が荼毘に付された時に雨が降ってきて、クシナーラーの住民たちも香りの良い水をかけたとあります。それは遺骨を採るためだったと思われま。事実、この骨を間近で見ますと、途中で水をかけたと思われる跡があります。釈尊が亡くなった後、8つの部族が参りまして8つに遺骨を分け、仏塔（ストゥーパ）を作って祀ったといわれております。

お話のはじめにそぐわない写真と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、ともかく釈迦の涅槃と遺骨が仏教徒にとっては始まりになるということを確認しまして次の図に参りましょう。

図2にはストゥーパつまり仏塔が見られます。これは、ニューデリーにある国立博物館にあるものですが、2世紀頃のものと考えられます。この写真に見られる卵型は仏塔の基本の形です。この仏塔には卵型の上に平頭と呼ばれるものがついていますが、これが仏塔の基本形であります。仏塔とは釈迦の涅槃（輪廻より抜け出したこと）のシンボルです。ブッダの滅後、ブッダは人間の姿に表されることはなく、当時、ブッダを礼拝しようとするれば人々はこの仏塔を礼拝していたと考えられます。

図3の作品は実に古いものであり、おそらく1世紀頃のものと考えられていますが、ベルリンのインド博物館に所蔵されているものです。人々は丸い環のようなものを持っています。これは花を糸でつな

(4)

いで花環にしたものです。ブッダを礼拝する際、人々はこの花環を持って仏塔に掛けていたことが分かります。

インド、ネパール、チベットでは、仏教のシンボルといえば仏塔です。また今の東南アジアにおいて、仏像はもちろんありますが、仏教徒にとってもっとも基本的なものは仏塔です。

図4は、少し時代が下りまして、3世紀頃のもので、ニューデリーの国立博物館の所蔵品です。人々が仏塔を礼拝している様がよく描かれております。死者を荼毘にした後、遺骨や遺灰を川に流す場合も、あるいは土に埋める場合もありますが、その荼毘が行われた地に木を植えることが、インド古来の習慣でした。多くの国で死者儀礼にあつては木が重要な役を果たすことがしばしばなのですが、図4でも木が聖なるものとして礼拝されています。仏塔の上に木を植えることもよく行われて

おりました。というよりも、平頭は、元来は樹木の周りの柵をデザインしたものと考えられます。図5はカルカッタのインド博物館にあるもので、紀元前1世紀頃の有名なパールフット仏塔の遺跡のもので、人々は聖樹を礼拝しています。



図3



図4



図5

これは、人間の姿に表すことがむしろブツダの力なり威厳を損ねるのではないかと、人々が心配をしたためと考えられます。今日ユダヤ教とかイスラム教において神を人間の姿で表すことはありません。

この仏塔（図7）は、ラオスの首都ヴァンチャンにありますラオ

図6を見てください。椅子つまり座はありますが、ゴータマ・ブツダのすがたはありません。人々は手を合わせて礼拝をしています。椅子の上部に法輪がありますが、この法輪がブツダの説法のシンボルです。これは1～2世紀の作例と考えられます。

初期仏教においてブツダが歴史的な人間、歴史的な存在であったことはよく知られていたのですが、すでに述べたように、ブツダを人間の姿に表すことはありませんでした。そ



図6



図7

ス最大の仏塔タートルアンです。この仏塔がいつの頃の造営であるのかはよく分かりませんが、この地に伝えられている話では、ここに仏教寺院が3、4世紀からあったということです。現在の形の近いものができあがるのは、12世紀あるいは13世紀以降のことだと思われます。東南アジアの仏教では仏塔が大きな位置を占めるのだということを強調しておきたいと思います。

紀元1、2世紀以降、ブッダは人間の姿で現されるようになりますが、仏塔の重要性がなくなった、あるいは減少したわけではありません。インド、チベット、ネパールの仏教史の中では仏塔の重要性を常に考えておく必要があります。

仏塔を見て人々はブッダを思い出します。日本における仏塔はインド、チベットなどの場合とは異なっております。日本における五輪塔とか仏塔は一般の人の墓として機能する場合が一般的です。インド、ネパール、チベットにおける仏塔の意味と日本における仏塔の意味はかなり違うということをもまず覚えておいていただきたいと思います。もっとも最近の東南アジアでは一般の人の墓としての仏塔も多く建てられています。

日本の仏教寺院の境内にはしばしば五重塔や三重塔などの仏塔がありますが、それらの屋根の一番上にお椀を伏せたような小さなものがあります。あれが仏塔の本体なのです。三重塔、五重塔のほとんどの

部分は仏塔の基壇でありまして、仏塔の本体は小さなお椀を伏せたようなものです。お椀を伏せたようなもの、これは卵であり世界を意味するのですが、この世界という意味が日本仏教ではほとんど消えているといえましょう。

3

ブッダの滅後2～3世紀経ちますと、ジャータカ（本生物語）^{ほんじょう}が生まれてきます。ジャータカとはブッダの前世を語る物語です。ブッダの在世当時には輪廻説が存在したことは確かなのですが、釈迦自身は輪廻説をほとんど取りあげませんでした。しかし、時間が経ちますと、釈迦族の太子として生まれたあの生涯の前世が何であったか、と人々は考えはじめ、前世をテーマにしてさまざまな物語をつくるようになりました。つまり、釈尊にも前世があったのだということの人々が認め始めたのです。

図8はアジャンタ石窟の中の17窟に残っている壁画です。難民たちが旅をしていると象に出会います。難民たちは水がどこにあるかを象に尋ねます。象は水のありかを教えて、付け加えます。「向こうに象が死んでいます。あなたたちはその象を食べたらよいでしょう」といって象は先回りをして、水のある所で死んで横たわります。水のあ



図8

る所に着いた難民たちは、水を飲み、象の肉をバーベキューにして食べたという話ですが、実はこの自分の命と肉体を捧げた象は修行中の菩薩としてのブッダつまり、ブッダの前世だったのであり、このような自己犠牲によって功德を積んで次の世ではブッダとなった、とジャータカ物語は説きます。このように、出家して悟り、人々のために働き、涅槃に入ったというブッダの生涯を、自己を捧げて人々のために尽くした生涯であった、と人々がブッダの生涯を解釈してジャータカ物語を作ったのです。

ジャータカ物語はブッダの過去世の物語であって、次の世のブッダの物語ではありません。しかし、人々は次のように考えはじめました。「肉体を持ったかのシャカムニは亡んでしまったけれども、ブッダはどこかにいてまた説法をしているのかもしれない、というよりも、ブッダはまた姿を現してわれわれを導いてくださるに違いない」と考えはじめたのです。

大乘仏教の台頭以降、仏教はそれまでとは異なる新しい世界に入っていきます。つまり、ブッダが再び自分たちの前に姿を見せてくださるに違いないといった信仰が大乘仏教の根幹になったのです。阿弥陀とか大日とかいった仏たちは、そのように期待し望んだ人々が釈尊のこの生涯を解釈し直すことによって、生み出された仏なのです。

4

インドの西北地方ガンダーラの地方において紀元1、2世紀にブッダの人間の姿を採ったブッダが造形作品として表されるようになりました。これは皆さんよくご承知だと思います。この像(図9)では流麗な衣の襲と少しギリシャっぽい造りが特徴となっています。ここでは写実的な姿で人々やブッダが現されております。

図10のベルリンのインド博物館の所蔵品では、ブッダは右手の先を大地につけております、シッダールタ太子が魔を降伏して悟りを開いたときの様子を、このような仕草で表すことになっています。この



図9



図10



図11

写真に見られる姿は写実的ですが、ガンダーラ仏の表現は一般に写実的ですが、**図11**（ベルリンのインド博物館所蔵）の中央には、赤子が描かれていますが、ブッダの誕生の場面です。ここでもブッダは超人的な神としては描かれてはおりません。

図12の作品は、先ほども触れましたベルリンのインド博物館にあるものですが、3世紀頃の作品です。これもガンダーラ様式のもので、3世紀頃になりますと、今まで描かれなかった、涅槃に入った姿のブッダが描かれることになります。それ以前は仏の涅槃は仏塔によって表されていましたが、涅槃に入ったブッダつまり、人間の姿のブッダが涅槃に入ったときの姿を描くには、ブッダの滅後、幾世紀も



図12

の時間が必要でした。

デリーから少し車で数時間行ったところにマトゥラーというところがあります。ここを中心に1、2世紀頃に造形運動がおこります。注意すべきことは、マトゥラーでは仏教のみではなくヒンドゥー教やジャイナ教の「神々」の像も作られたことです。ガンダーラ地方では、題材が仏教に限られておりまして、その後ガンダーラの様式がインドに長く残ることはありませんが、マトゥラー様式のものはこの後のインドの造形運動の核となっていきます。

図13は弥勒菩薩です。水瓶を持っています。ガンダーラ様式にあっては着物の襞が強調されますが、マトゥラー様式の場合、着物の襞が目立つということはほとんどありません。

図14はサルナート様式の仏像で、ニューデリーの国立博物館所蔵品です。ガンダーラ様式の仏像に見られた衣の襞はほとんど見られません。マトゥラーの彫像は赤い砂岩に彫られることが多いのですが、この像の場合は白と黄色の中間色の砂岩に彫られています。ここでわたしが強調したいのは、今われわれが見たマトゥラーのブッダもサルナートのブッダも出家の比丘の姿で表されているということです。

時代が下ってまいりますと、図15のようにブッダは冠をつけた姿で表されるようになります。これもニューデリーの国立博物館所蔵



図13



図14



図15



図16

品であり、10世紀頃のもので、7～8世紀にはブッダは冠をつけ、髪を結び、天衣といいますか煌びやかな服装をつけ、胸飾りをつけたイメージで考えられるようになります。

さて、**図16**はニューデリーの国立博物館にある、トゥルファン出土のもので、9～10世紀のものですが、このころになりますとブッダが宇宙論的に考えられます。いわゆるコズミック・ブッダといわれているものです。中央アジアでは、「宇宙的」つまり、ブッダの身体が宇宙と考えられ、その宇宙全体を覆うような姿でブッダが表されることが多くなります。宇宙的ブッダのイメージがインドにおいても見られるのですが、中央アジアにおいて、より多くなります。

5

また仏塔の話に戻ってまいります、**図17**の仏塔はエローラの仏教窟第10窟のもので、仏像の後に仏塔が見えます。仏塔もその前の仏像も同一の巨大な岩から掘り起こされたものですが、仏塔の前にこういった仏像が作られるようになります。このエローラ第10窟は



図17



図18

おそらく8、9世紀と考えられますが、この時期には仏塔の側面にこのように仏像が彫られることが多くなります。

ようするに人々は土饅頭のようなあるいは卵のようなイメージに満足することなく、その仏塔からブツダが人間の姿をとって現れることを期待して、あるいは現れていると考えて、そのイメージを造形作品に残すようになったのです。

図18の仏塔は、カトマンズ盆地の東部にありますボードナートと呼ばれる仏塔です。この仏塔の特徴は、平頭の部分に目と鼻が描かれていることです。仏塔の平頭に目鼻が描かれていることは少なくともエローラ石窟において見られません。

このネパール仏塔には多くのチベット人が参拝に来ます。ここの仏塔の名前はチベット語で「チャルンカショル」といいます。この名称の由来を語る話が伝えられています。あるお婆さんが仏塔をこの地に建てたいと地主に申し出ます。するとその地主は、「建てても（チャ）良い（ルン）と口（カ）が滑った（ショル）」と伝えられています。それならば、ということで、そのお婆さんはとてつもなく大きな塔を建ててしまったということです。チベット人たちがネパールにやってくる際にはこの仏塔に参拝するといわれています。

ここでは仏塔がブツダの身体と考えられていることに注目しましよ

う。先ほどの図17の場合には、仏塔の側面からブツダが出現したのですが、図18では仏塔の平頭そのものに目鼻がついています。このようにすれば、仏塔がブツダが坐っている姿だということを明白に示すことができます。

すでに前に述べましたように、卵は世界を意味します。卵形を基本にしている仏塔は世界を意味し、さらに坐っているブツダの姿でもあるということになってまいります。ようするに、ブツダは世界であり、世界はブツダの身体だ、というような考え方が生まれてきたのです。世界が神の身体だという考え方は、ヒンドゥー教では紀元9世紀頃から一般的となります。8、9世紀以降の仏教においてもそのような考え方が見られるようになります。後でマンダラについてお話いたしますが、マンダラは神々が住む館なのですが、一方ではマンダラ全体は一人の巨大な仏の身体であるとも考えられています。その巨大な仏の身体はとりもなおさずこの世界であるというのが、仏教のタントリズムの結論であります。

今日のお話の初めに、仏教にとって仏塔が重要だと申しました。世界であり、ブツダの身体であり、マンダラでもあるものを表すには仏塔はすぐれたシンボルです。仏像のみによっては、世界のすがたをとるとこのような象徴意味を表すことは困難です。

6

ヒンドゥー教にシヴァ神という神がありますが、シヴァのシンボルの最も重要なものはリングです。「リング」とは男根を意味します。仏塔の上部すなわち平頭を取りのぞいたものをヒンドゥー教徒は、リングと呼んでいるのです。ヒンドゥー教および仏教両方とも、世界という姿の「神」を崇めてきたのです。このように、ヒンドゥー教と仏教とはインド的なベースに基づいています。そのベースとは、世界を卵(アング)で表したということです。ヒンドゥー教のシンボルと同一になってしまいますから、ヒンドゥー教徒に対抗するために仏教徒は

こういった平頭をつけたと考えられます。その卵の上に仏教徒は平頭をつけて仏塔としました。一方、ヒンドゥー教徒は平頭のないもの、つまりリングを崇拜します。仏教徒が仏塔を拝むのと同じように、ヒンドゥー教徒はリングを拝んできたのです。

仏教は仏塔というシンボルを当初から今日にいたるまでもっており、世界とブッダとの関係をシンボリカルに表すことができるような装置をもっていたということが出来ます。

今日のお話の最初に、インド古代のウパニシャッドの一節を読み上げましたが、インドの伝統によれば、宇宙の根本原理であるブラフマンは食物であり、息であり、眼でもありました。ようするに、世界あるいは世界を構成するものが根本原理なのです。仏教においても、仏塔がブッダの悟りの境地を意味するとともに、世界のシンボルであり、さらにブッダの身体をも表すと考えられました。このように見てくると、バラモン教（あるいはヒンドゥー教）と仏教とは共通の基盤に根づいているということが分かります。



図19

図19は、カトマンドゥ盆地のものですが、ご覧になって分かるように、この仏塔の本体は平頭の下の卵形です。卵形およびその下部がメール山であるといってもよいでしょうし、世界といってもよいのですが、その四面に仏が配置されます。図19に見られる中央の仏は禅定印を結んでいます。この印からこの仏は西方に位置する阿弥陀仏であることがわかります。写真左の仏は北に位置する不空成就如来です。写真右の仏は宝生

如来です。そして、この写真では見えませんが、阿弥陀仏の反対側にあるのが阿閼（あしゅく）如来です。このように金剛界の四仏が仏塔の四面に彫られています。これは立体的なマンダラであると考えられます。後世はこの仏塔全体が、四人の仏を含んだまま、一人の巨大な神の姿であると考えられます。

7

さて人々は、肉体をもった釈迦は死んでしまった、しかし、ダルマ（法）そのものは永遠のはずだ、ダルマがブツダにちがいない。そして、どこかの時点では肉体をもたなくても、すがたを採ってわれわれの前に現れてくるはずだと、あるいは現れてきてほしいというような願いを人々は持つようになりました。

このような考え方が、紀元後4世紀あたりまでには三身仏の思想、つまり「三つの位態にある仏の思想」として結実することになります。第一が法身仏、第二が報身仏、第三が化身仏です。法身仏とは法そのものを体としている仏です。この仏には姿かたちがなく、見ることができません。二番目の報身は、歴史的に肉体を持ったゴータマ・ブツダのような存在でなくても、姿かたちをもち、働きをもってわれわれの前に現れてくるであろうと考えられている仏です。第三の化身仏とは歴史上に肉体をもって現れた仏、つまりゴータマ・ブツダ（釈迦牟尼）です。

図20はカトマンドゥウ在住の画家が描いた白描ですが、ここに見られる仏は東方に住むと考えられている阿閼仏です。インドの神や仏にはそれぞれの乗り物として動物が定められていますが、この仏は象を乗り物としています。図20を描いた同じ画家によって図21も描かれましたが、この図に見られる仏は孔雀に乗っております。孔雀に乗る仏は阿弥陀仏です。この二つの図に描かれた仏は多くの腕を持ち、多くの面を持っています。このような姿の仏は日本ではなじみがありませんが、後世のインド、ネパール、チベットにおいてはよく知られて



10 अमिताय

図20



20 अमिताय

図21



図22

います。

図22は、カトマンドゥ盆地にはスヴァヤンブーと呼ばれる仏塔がありますが、その仏塔の西の側面を掘り込んだくぼみに祀られている阿弥陀仏です。阿弥陀仏はここでは金色に塗られています、伝統的には体の色は赤いとされています。

阿弥陀はわれわれの国である娑婆世界に住むのではなくて、極楽浄土というわれわれの世界からはるか彼方にある「銀河」に住むと考えられております。しかし、浄土経典には、われわれが阿弥陀仏を見よ

うと思えば、この娑婆世界において見ることができる、と述べています。

図23はさきほども名前を挙げました阿闍仏ですが、冠をつけております。これはカトマンドウ、チャウニー地区のネパール国立博物館所蔵のもので、16、17世紀以後の作品と思われます。もっともこのような阿闍仏のイメージは、インドではすでに8、9世紀には存在したと考えられます。これまで見てきたように、グプタ朝までは仏はほとんどの場合、出家僧の姿をしておりました。その後は、菩薩のように宝冠をもち、きらびやかな衣を身につけた姿で表現されることが多くなります。

このようにブッダは出家僧の姿で表されていましたが、7世紀頃には飾ったブッダとして現れます。これは大きな変化です。大日如来のイメージ

が確立するのは大体7世紀頃ですが、大日如来とは東大寺の毘盧遮那仏が密教的になった仏と考えることができます。この仏は飾られたすがたで表されることがしばしばです。

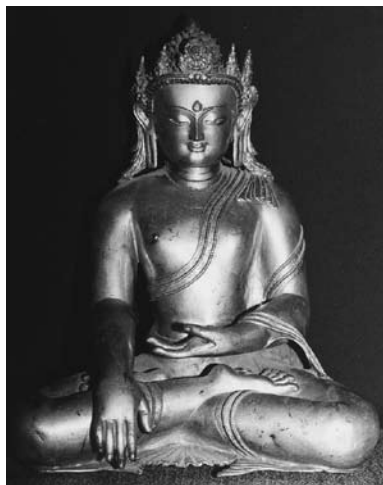


図23



図24



図25

図24の仏は大日如来です。10世紀頃のインドのものですが、ニューデリーの国立博物館所蔵のもので、これも冠を被っています。この仏が結んでいる、金剛を持った覚勝印（智拳印）は11、12世紀編纂のインドのマンガラ集『完成せるヨーガの環』（ニシュパナヨーガヴァリー）第19章「金剛界マンガラ」に述べられる大日如来の印相と一致します。これが出家僧の姿でないことはいうまでもありません。

次の図25も冠を被った大日の姿を示しています。チベットに伝えられた金剛界マンガラの中尊としてカトマンドウのチベット仏教寺院の壁に描かれたものです。図24、25に見られるように、大日は一般に四面を有すると考えられています。

5、6世紀までは、法（ダルマ）そのものは背後に控えており、人間の姿をとることもなく、法そのものが説法することはありませんでした。それまでは法身仏は人格（ペルソナ）を持っていなかったのですが、この7世紀頃からは、大日は説法する法身仏であると考えられるようになりました。

このように仏の姿がさまざまに変わってまいります。1、2世紀ごろにブッダは人間の姿で表現され、4世紀頃にはブッダの三つの位態として「三身」が現れました。そして、7世紀頃には、ブッダ比丘の

姿ではなく、菩薩のように着飾った人間の姿で表され、さらに、法（ダルマ）そのものが説法するとも考えられるようになりました。その後1、2世紀経て、8、9世紀には、おそろしい姿のブッダが現れます。例えば、**図26**はそういった仏の一人であり、ヘーヴァジュラ（呼金剛、ここんごう）と呼ばれます。頭蓋骨を持って妃と抱き合っているようなおそろしいすがたのこの尊格は護法神ではなく、ブッダつまり世尊で



図26

す。大阪の国立民族学博物館所蔵のもので、こういった新しい姿のブッダが登場いたします。9世紀の中頃、中国から日本への仏教の公的導入が終結しましたので、日本にはこのような形の密教はほとんど入ってきておりません。

8

紀元500年あたりに簡単なマンダラが成立します。マンダラとは当初は携帯用の祭壇であったようなのですが、9世紀頃になりますと、世界の中心である須弥山をマンダラの中に組み入れまして、マンダラが一つの宇宙図としての意味をもってくるようになります。

今日は時間の関係上マンダラのお話はできませんが、マンダラには三つの要素が必要です。第一はマンダラに登場する神々あるいは仏たちがいることです。第二は神々（仏たち）が住む館つまり場です。**図27**（法界マンダラ、カトマンドゥ）に見られる四角い枠は、仏たちが



図27

並んでいる館を表しています。その館の屋根が透明であって、中を上から見ることでできるとして下さい。このようにマンダラは、神々と仏たちが住む館上から見たものです。館はメール山の上に建っていますから、館の外の緑の部分はメール山頂の芝生であるとも考えてください。

もう一つ、マンダラには重要な要素が存在しなくてはなりません。人がマンダラ図に対して行為しなくては、マンダラはマンダラとなりません。その中に入っていきなり、これを礼拝するなり、この中に入っている仏たちと一体になる修行をするといったかたちの実践行為がマンダラには必要です。これが第三の要素です。

9

われわれはまず仏塔を見ました。そして釈迦（シャカ）あるいはブッダが人間の姿で表されるのを見ました。人間の姿で表されたブッ



図28



図29

ダが順次、煌びやかに飾られるようになり、さらにはおそろしいすがたに描かれるようになったのも見ました。一方、この仏塔の側面にはブツダたちが彫り込まれるようになりました。9、10世紀になりますと、仏塔とマンダラとが合体をいたします。

図28は立体的なマンダラです。中央にそびえ立っているのは須弥山です。このマンダラは、カトマンドゥ盆地のチベット仏教寺院にあるものですが、元来はチベット仏教のものではなく、カトマンドゥ盆地のネワール仏教のものでした。というのは、このマンダラの下部にはサンスクリットの銘があります。もっともこのマンダラの様式にはチベットおよび中国的要素が見られます。このマンダラのレプリカが、チベットに住んだ経験のあるネワール人によって作られ、今日、国立民族学博物館に展示されています。

図29も国立民族学博物館所蔵のもですが、チベット仏教の立体マンダラです。ブータン様式によって作られています。『チベット死



図30

者の書』と一般に呼ばれている書がありますが、この書は中有（ちゅうう）と呼ばれる期間、魂が漂うさまを描いています。人が死んで、次の肉体を得るまでの49日間、魂は「空中遊泳」のような状態にあります。この期間を中有といいますが、この期間の間にさまざまな仏や菩薩が現れて死者を導こうとします。この導きを説明したものが『チベット死者の書』ですが、図29はこの書に述べられる仏・菩薩と彼らが住む館とのコンプレックス（複合体）をマンダラとして表現したものです。図30は図29の部分を示しています。

10

インドおよびその周辺国のブッダのすがたの変容について述べてまいりましたが、ここでまとめてみましょう。

仏塔は、ブッダの遺骨（仏舎利）が基本になっております。今日の東南アジアにおいて仏塔は仏舎利を含まねばならないと考えられてい

ます。ブッダが涅槃に入ったということが仏教徒の出発点であり、終着点でもあります。それを仏塔という形で人々は表したのです。ちょうどそれはキリストが十字架上で死んだということがキリスト者の始まりであることと同じです。

仏塔は、およそ1、2世紀の頃にはすでに世界としての意味を与えられたと考えられます。一方、仏教徒は仏塔をブッダの涅槃のシンボルであると考えました。このように仏塔には、この世界から超越したすがた（涅槃）と、この世界そのものを表すというように、相反する方向を有する2種類の意味があります。

時代が下るとともにブッダが人間の姿で表されるようになり、そして初めは僧形であったのですが、煌びやかな姿に表されるようになり、そして、信仰の中で対話の相手とあるいは交わりの相手となる、人格（ペルソナ）を持った尊格として成長していきました。大日も阿弥陀もそのようなペルソナを持った信仰の相手であります。

仏塔の側面に仏像が彫られることもありますが、このような仏塔は後世マンダラと呼ぶことのできるような造形として作られていきました。もう一つ最後に重要なことは、インドではマンダラがブッダの巨大な宇宙的身体として考えられたということです。マンダラの中ではブッダは「世界の中へ」という求心的働きを強めます。一方、浄土教にあっては、阿弥陀仏に見られるように「世界の外へ」という遠心的働きを有します。ブッダ（仏）に見られるこの二面性は、先に述べた仏塔の二面性と呼应します。

ご清聴ありがとうございました。